

身体障害者に対する効果的な防災訓練指導方法に関する調査研究(1)

飯田 稔*, 熊倉 孝行**, 元橋 綾子*, 渡邊 美穂***

概要

身体障害者に対するより適切な防災訓練指導方法を把握するため、身体障害者自身が災害時に実施可能な行動と不可能な行動を見極めること、訓練実施時のコミュニケーションの取り方や説明方法など指導者側が注意すべき事項、訓練方法や資器材等についての工夫改善事項などを調査した。

主な結果は、以下のとおりである。

- 1 防災訓練参加者の感想は、全体的に「自信がついた」、「丁寧に教えてもらった」など好意的な意見が多かった。
- 2 肢体不自由者に対しての指導は、一人一人の障害にあった方法により実施する必要がある。
- 3 視覚障害者に対する指導では、具体的な指示と実体験が大切である。
- 4 聴覚障害者の指導では、コミュニケーションの取り方に工夫が必要である。
- 5 指導者にとっての障害者に関する情報が不足している。

1 はじめに

災害に弱い立場にある人々が、火災等の犠牲とならないためには、各自が防災訓練等に参加し、防災意識や自主防災行動力を向上させることが不可欠である。

当研究室では、平成9年から平成11年までの間、身体障害者の防災意識や防災行動力のあり方について調査を行ってきた。

本研究はその結果を踏まえ、身体障害者に対するより適切な訓練指導方法を把握する目的で調査を行った。

2 調査方法

本調査に先立ち、管轄署、該当する障害者団体に調査協力の同意を得た。また、必要な場合には関連する管轄区役所や社会福祉協議会にも了解を得た。

(1) 身体障害者に対する調査と質問事項

身体障害者が参加する防災訓練会場(応急救護訓練を含む)において、研究員が直接または手話通訳者を交えて身体障害者に対し防災訓練の指導方法等に関する聞き取り調査をした。その際、一人ひとり個別に調査協力の依頼をし、訓練風景をビデオカメラ等で記録すること、調査結果を公表する場合があること、プライバシーの保護には十分配慮することを説明し、同意を得られた人だけに調査を実施した。

主な質問項目は、次の3項目から成り立っている。質問票の内容については、事前に都内障害者福祉団体に意

見を伺い、障害者から見てふさわしくない言葉づかいや矛盾がないよう配慮した。

ア これまでに体験した防災訓練等の種別や回数、その時の指導者側を含めた問題点や反省点などに関する質問
イ 当日体験した訓練の感想あるいは体験できなかった訓練があればその理由、指導者側の指導方法、接遇、会場等に関する質問

ウ 障害者ごとに異なる障害者個人の障害程度や介助者の状況を明らかにするための属性等に関する質問

(2) 視聴覚的調査

参加した身体障害者の中で、日程の都合やその他の事情により同意を得られなかった場合には、聞き取り調査を行わず、訓練実施時の指導者の指導方法・介助方法、障害者の行動動作等について、筆記で記録をとった。

(3) 指導者に対する調査と質問事項

指導する側の意見も参考にするため、当日参加した消防職員に指導方法に関する質問用紙を渡し、記入後返送してもらった。内容については、指導上の推奨事項、反省事項及びその他参考になること、をたずねた。

3 実施訓練及び調査対象者

平成12年度から13年度までに実施された身体障害者に対する防災訓練のうち、主催者側の承諾を得て、聞き取り調査を実施した防災訓練は7件で、個別に調査を了

*第四研究室 **小石川消防署 ***石神井消防署

承した 83 名からの回答を得た。(表 1) また、聞き取り調査の同意が得られず、視聴覚調査のみを行ったものは 3 件で約 130 名が参加していた。(表 2)

表 1 聞き取り調査対象訓練主催者及び対象者数

| 防災訓練主催者 | 対象者数 |
|--------------|------|
| A 市社会福祉協議会 | 10名 |
| B 区聴覚障害者団体 | 15名 |
| C 市授産施設 | 20名 |
| D 区聴覚障害者支援施設 | 18名 |
| E 市障害者スポーツ施設 | 9名 |
| F 区授産施設 | 4名 |
| G 区視覚障害者授産施設 | 7名 |
| 計 | 83名 |

表 2 視聴覚調査対象訓練主催者及び対象者数

| 防災訓練主催者 | 対象者数 |
|----------------|-------|
| H 区役所(視覚障害者対象) | 約40名 |
| I 区ろう学校 | 約60名 |
| J 市肢体不自由者入居施設 | 約30名 |
| 計 | 約130名 |

4 集計及び分析方法

(1) 属性の集計

集計は単純集計及び二つの質問項目から成るクロス集計を行った。

(2) 訓練内容の質問の集計

訓練体験回数や参加した消火訓練の種別のように数値または、明確にカテゴリー分けできるものはそのまま単純集計及びクロス集計を行った。

感想や意見などは、類似した内容ごとに一括し、カテゴリーに分け、単純集計及びクロス集計を行った。

5 調査結果

聞き取り調査では、83 名からの回答を得た。

(1) 属性について

ア 男女比

男性が 47 名 (57%)、女性が 36 名 (43%) で、男性の方が 14% 多い。

イ 年代構成

60 歳代が 29 名 (35%) と最も多く、ついで 50 歳代で 22 名 (26%)、40 歳代が 12 名 (14%) で、中高年が多い傾向がある。これは、平成 6 年度東京都社会福祉基礎調査報告書にある年齢構成とほぼ一致する。

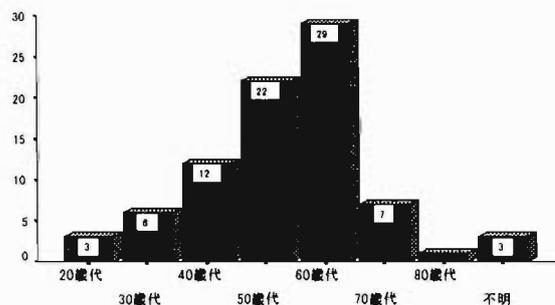


図 1 年代

ウ 障害の種類

聴覚障害者が 33 名 (40%) と最も多く、ついで肢体不自由者が 17 名 (20%)、視覚障害者が 9 名 (11%) である。2 種類以上の障害を持つ「複合障害者」は 13 名 (16%) で、その内訳は、「肢体不自由と視覚」が最も多く 6 名、ついで「肢体不自由と聴覚」が 5 名、「視覚と聴覚」が 2 名であった。

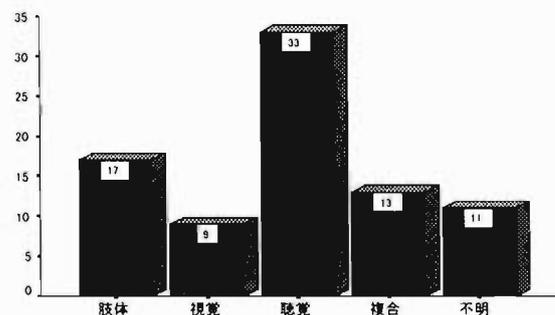


図 2 障害の種類(名)

エ 補装具の種類と使用状況

補装具を使っている人の中では、杖(視覚障害者の白杖も含む)を使っている人が最も多く 19 名、補聴器が 16 名となっている。「その他」としては、歩行器や盲導犬の他にガイドヘルパーといった介助人を挙げている回答もあった。なお、補装具を使用していない人は 34 名であった。

補装具の使用状況は、外出する時だけ使用するという人(「自動車の運転時に使用する」と回答した 2 名を含む)が 24 名で最も多かった。特に視覚障害者はほぼ全員が外出のみの使用であり、物の配置等を把握している自宅に対して不慣れな自宅以外において大きな困難が伴うことが予想される。

オ 外出の状況

外出の頻度では、毎日外出する人が 39 名 (48%) と最も多く、約半数を占める。

また、どのような目的で外出するかを尋ねたところ、「趣味、サークル、遊びなど」と回答した人が最も多く 37

名、次に「買い物」32名、「仕事」26名となっている。複数の回答結果を得られたことから、回答者の積極的・行動的なライフスタイルがうかがえる。

(2) 過去に参加した防災訓練について

ア 過去の防災訓練参加状況

全体の79% (66名) が過去に防災訓練に参加したことがあると回答している。そのうち36% (30名) が5回以上参加している。なお、本調査は身体障害者関連施設におけるものが多く、繰り返し防災訓練に参加している人の中には、通所している施設や職場で例年行われている自衛消防訓練に参加している人が多く含まれていると考えられる。したがってこの数値は、一般的な身体障害者の参加状況を反映したものとは異なる。

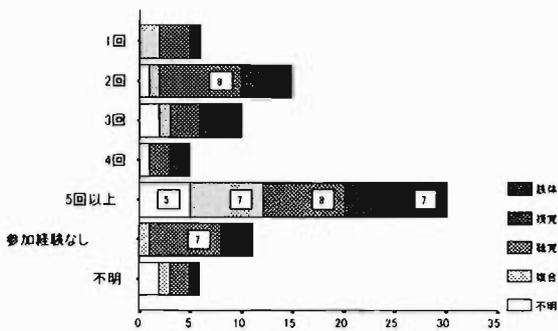


図3 訓練参加回数 (名)

過去に防災訓練に参加したことがある人に対して、それぞれの訓練種目についての感想を聞いたところ「消火訓練」には50名、「避難訓練」については43名、「応急救護訓練」には33名より回答があった。「応急救護訓練」は肢体不自由者が少ないが、手先の複雑な作業が要求され、上肢の障害者には不向きであることが予想できる。

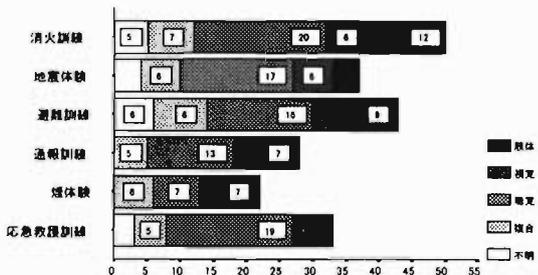


図4 訓練ごとの回答者数 (名・複数回答)

イ 過去に参加した消火訓練について

過去に参加した消火訓練後の感想について、口述または記述されたものをカテゴリー分けした。(以後の回答についても同様)

「自信がたった」という感想が最も多く、25名が回答している。ついで多かったのが「うまくできない」で、6

名の人が回答している。その中には、「力が入らないので(水が)火のところまでいかない(複合)」、「火と自分の位置がわかりづらい、どちらに水をかけるのかわからない(視覚)」等の回答があり、それぞれの障害に関して特徴的な意見も見られた。

その他には、「今後も訓練も続けたい」「片麻痺もやり方を考えられる」等さまざまな意見があった。

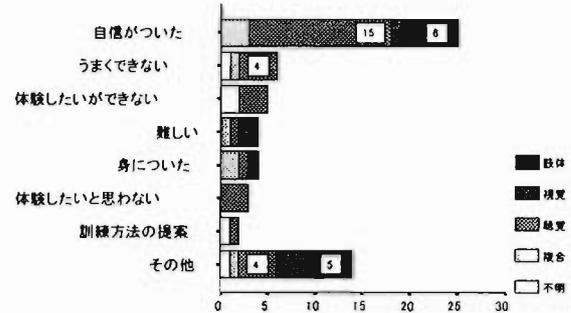


図5 過去の消火訓練の感想 (件・複数回答)

ウ 過去に参加した地震体験訓練について

「自信がたった」という感想が最も多く20名が回答している。ついで「うまくできない」「体験したいができない」でそれぞれ5件となっている。「その他」(13件)の中には『これから揺れが強くなります』という声掛けが事前にあり、震度が上がるのが事前にわかり期待していたのと違った。地震は突然くるものなので、(訓練で)気を遣われすぎるとどうかと思う(複合/視聴覚)など、障害者との接し方のヒントとなるような回答もあった。

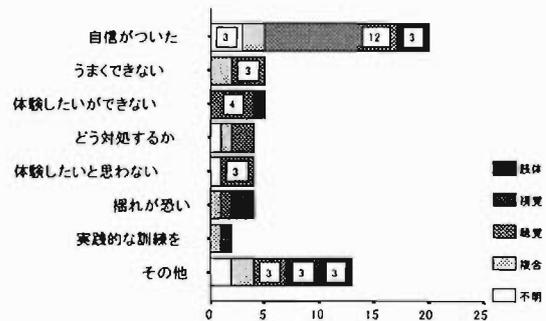


図6 過去の地震体験訓練の感想 (件・複数回答)

エ 過去に参加した避難訓練について

「自信がたった」と回答した人が最も多く22件だった。次に「うまくできなかった」という回答が9件、「移動が困難」が3件だった。この3件は複合障害者(視覚と肢体)2名と視覚障害者1名からの回答であり、困難さの理由として「階段」や「狭い通路」等が延べられている。このことから視覚障害者や肢体不自由者にとって、スムーズな避難を困難にする共通のバリア(障壁)とな

っていることが推測される。

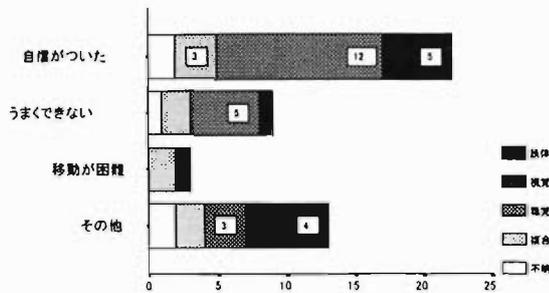


図7 過去の避難訓練の感想 (件・複数回答)

オ 過去に参加した通報訓練について

最も多かったのが「自信がついた」という回答で17件だった。次に「うまくできない」が7件だが、これは聴覚障害者と複合障害者の中でも聴覚障害を合わせ持つ人達からの回答だった。「その他」の回答としては「実際に通報したことがある (肢体)」「健常者と同様に問題ない (視覚)」などの意見があった。

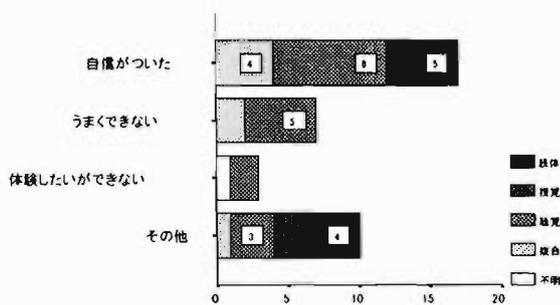


図8 過去の通報訓練の感想 (件・複数回答)

カ 過去に参加した煙体験訓練について

他の訓練と同様に最も多かったのが「自信がついた」という感想で12件だった。その他の意見としては「くぐり抜けるのが大変 (視覚)」というものや「(私は) おいがわからない。無害だが目にしみるなど、煙に工夫してほしい (視覚)」という意見もあった。

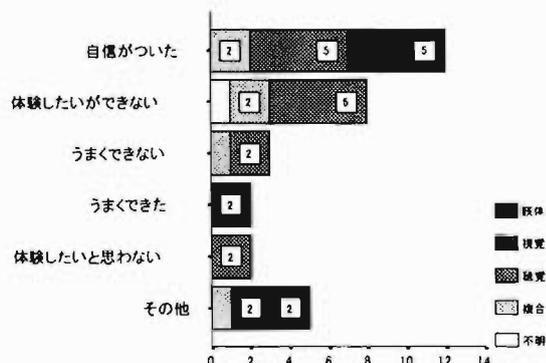


図9 過去の煙体験の感想 (件・複数回答)

キ 過去に参加した応急救護訓練について

「自信がついた」という感想が最も多く17件だった。「三角巾が難しい」という感想が3件 (視覚1名、複合2名) あった。三角巾を使用した包帯法は手順が複雑であり、健常者に対する指導においても、口頭説明と併せて実演で示しながら行うのが通常である。そのため、視覚による情報入手が困難である視覚障害者にとっては、理解しにくい訓練であることが容易に推測できる。

「人工呼吸が難しい」(2件) については「息の吹き込み方が難しい (視覚)」「息 (呼吸音) が聞こえない。相手が呼吸しているのを知る方法 (がわからない) (聴覚)」という意見がみられた。「三角巾」と「人工呼吸」のいずれについても、障害に配慮した説明方法の工夫、口頭だけでなく「手取り足取り」での指導が必要であろう。

「その他」は4件で「職員が戸惑っていて声をかけるのが怖いみたいだ (視覚)」「手取り足取り教えてくれたのが嬉しい (肢体)」という内容だった。過度に遠慮したりせずに接するためには、指導者側が障害に対する知識を持って接することなどが、改善方法のひとつと言える。

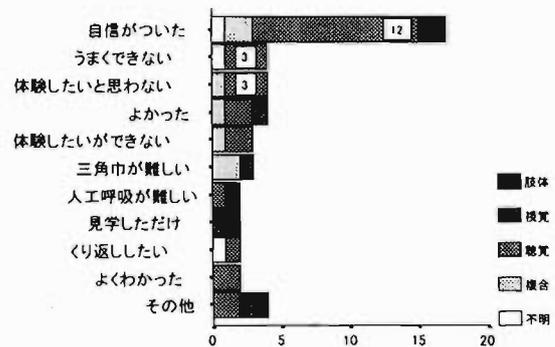


図10 過去の応急救護訓練の感想 (件・複数回答)

(3) 過去の防災訓練での指導者に対する印象等

過去の防災訓練において指導者に対する印象等で最も多かったのが「わかりやすく丁寧な説明をしていた」で31件の回答があった。

次に「言葉遣い・接遇がよい」という内容で14件だった。反対に「言葉遣い・接遇が悪い」は4件で「気を遣いすぎる (複合/視聴覚)」や「『耳が悪い』というより『耳が聞こえない』と表現した方がいい (聴覚)」「『あれ』『これ』『ここをこうして』など視覚障害者には全くわからない指示代名詞が多い。障害者に接するのに慣れていないようだ (視覚)」という具体的な指摘もあった。

「障害者の立場を理解してほしい」とまとめられる意見は8件で、その中には「(避難訓練で視覚障害者の) 逃げ方を知らない。目隠し等して視覚障害者の立場を理解してほしい (視覚)」という意見もあった。

「手話通訳が必要」というものは4件だが、うち2件は「指導者自身が手話のできた方がいい」というものであった。

「説明がわかりにくい」は2件で「指導者の説明が見えにくい（聴覚）」「話が長い。短くまとめてほしい（聴覚）」などの意見があった。

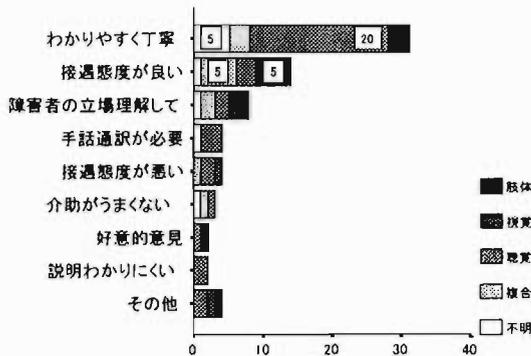


図 11 指導者に対する意見 (件・複数回答)

(4) 今回参加した防災訓練について

ア 消火訓練について

消火訓練は5箇所で開催され、参加者55名のうち37名から回答があった。

「うまくできた」という回答が最も多く16件、ついで「自信がたった」が10件、「いざというとき役立つ」が6件だった。

「消火器が扱いにくい」では、肢体不自由の参加者から「ホースに力を入れることができない」「持ち上げるのが難しい。ペダル式ならできるかも」「上肢麻痺は、消火器は右肘で押す」という具体的にできないことや、工夫の方法についての意見を得ることができた。また、「訓練方法の提案」(3件)は、「本物の火を消してみたい」「本人は(消火を)的確にできないので、周りに知らせる訓練を(視覚)」という具体的な内容であった。

消火訓練に参加できなかった理由としては「遠慮してしまった」というものが2件、「(消火)液がすでになかった(肢体)」「希望したが断られた(聴覚)」などの10件の回答があった。

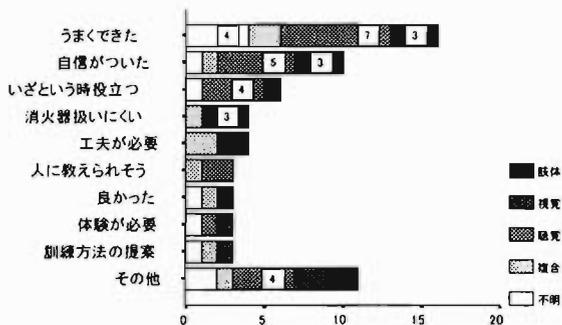


図 12 消火訓練の感想 (件・複数回答)

イ 通報訓練について

通報訓練は2箇所で開催され、27名のうち20名から回答があった。

「うまくできた」が8件で最も多く、「自信がたった」が5件で次に多い。

また「指導方法への要望」として、「住所を『〇-〇…』ではなく『〇丁目〇番…』と言うように指示されたのに間違えてやっていたが、訂正されなかった。誤ったまま覚えてしまう(視覚)」などの意見が、その他では「(電話の)ボタンが小さくて色が見にくい(複合/肢体と視覚)」などが挙げられた。

通報訓練ができなかった理由では「時間制限のため(視覚)」「人数制限のため(視覚)」「言語障害のため(複合/肢体と聴覚)」の計3件があった。

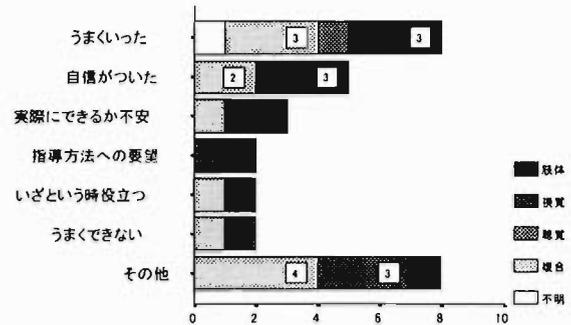


図 13 通報訓練の感想 (件・複数回答)

ウ 避難訓練について

避難訓練は5箇所で開催され、58名のうち46名から回答があった。

最も多かった回答は「うまくできた」で18件、ついで「いざというとき役に立ちそう」で7件である。

「不満」(2件)は、「人ごとみたいで本気でやっていない(視覚)」などの回答があった。避難訓練は勤務先などの自衛消防訓練などで、繰り返し参加している人も多くいることが予想され、障害者への配慮や、訓練手法の工夫がなされていないと、「いつもと同じ」「何度もやっている」等、マンネリな印象を抱かれるおそれもある。

また、訓練に参加できなかった理由としては、「人数制限」「遠慮した」「工夫すればできそう」という3件の回答があった。

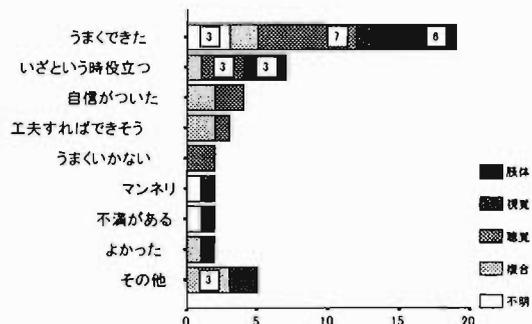


図 14 避難訓練の感想 (件・複数回答)

エ 応急救護訓練について

3箇所で行われ、43名のうち、21名から参加した感想を聞くことができた。最も多かったものは「わかりにくい」と述べたもので7件で、他の訓練種目に比べ、消極的な意見が多かった。続いて「よくわかった」6件、「自信がついた」4件などが挙げられている。

「わかりにくい」内容としては、椅子を使った傷病者搬送訓練で「担架を持つ位置は、『椅子の前足』とか『背もたれの両はじ』など、具体的に指示してほしい（視覚）」「説明が速すぎた（聴覚）」「展示位置が悪く見えない（肢体）」などの意見があった。

「できる（こと）・できない（こと）」（3件）では、「担架作成できるが、搬送は無理（肢体）」などの意見があった。「その他」（6件）の中には「人工呼吸も教えてほしい（聴覚）」「実際できるか不安（複合）」という意見も挙げられた。

なお、訓練できなかった理由は、「人数制限」（3件）、「遠慮した」（1件）と、4件の回答があった。

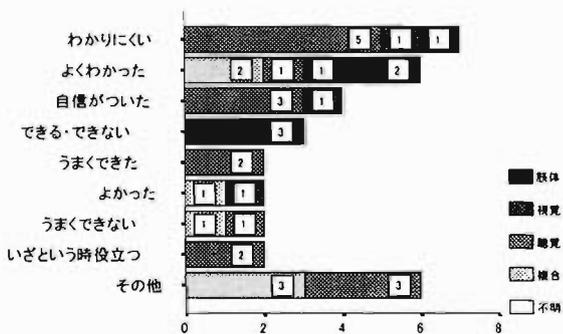


図15 応急救護訓練の感想 (件・複数回答)

オ 地震体験訓練について

1箇所で開催され、14名のうち12名の回答があった。「自信がついた」（7件）、「いざという時役に立ちそう」（5件）が多く、全体的にみて肯定的な内容のものが多く見られた。「その他」（6件）では、「ガスの元栓が止められない（聴覚）」「非常時、家のどこにいれば安全かわかった（聴覚）」といった具体的かつ、実際の災害を見据えた意見もあった。

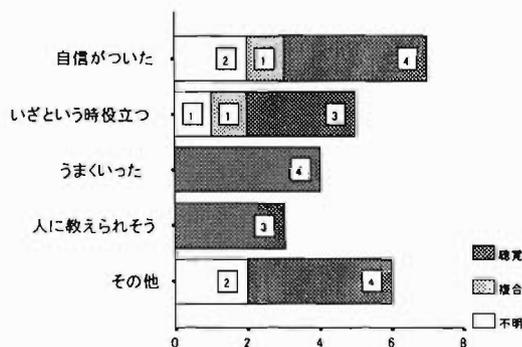


図16 地震体験訓練の感想 (件・複数回答)

訓練ができなかった理由として「人数制限」「希望した日曜で休みが多い（人数が多いから）」という2件の回答があった。

(5) 防災訓練に対する意見等

ア 今回の訓練を実際の火災や地震に生かすことができるか

「実際に生かせる」という回答が最も多く32件であった。ついで、災害時に実際どのような行動をとるか「具体的な行動」を述べたものが20件だった。

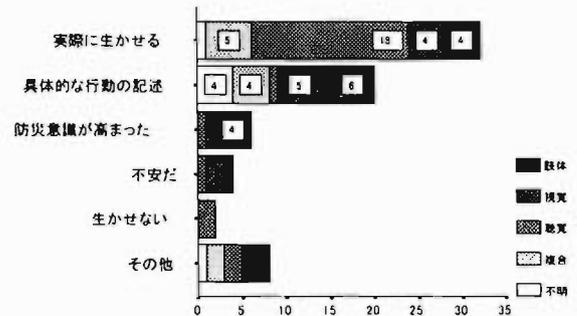


図17 実際の火災で生かすことができるか (件・複数回答)

表3 「具体的な行動」の内容

| | |
|----------------|-----|
| 避難する | 11件 |
| 消火する | 4件 |
| 通報する・出口確保・身体防護 | 各2件 |
| 応急処置・救助 | 各1件 |

「具体的な行動」を分類すると、「避難」が11件で最も多く、「消火」が4件、「通報」「出口・避難路の確保」「身体防護」がそれぞれ2件で、「応急救護」「救助」は1件ずつである。「避難」については、「逃げることはできない」「速く逃げる」「そのまま逃げる」と、切迫したイメージの回答が多い。また、他の行動に関しても「避難」と組み合わせて行いたいというものが目立ち、多くの人が災害時には「避難」を最優先に考えていることが推測される。

「防災意識が高まった」に関する内容は6件で、「火事を出さない（肢体）」「落ち着いて（対応する）（視覚）」などの意見があった。「不安」については4件あるが、「通訳がないとき（不安）（聴覚）」「消火器の使い方覚えていられるか（視覚）」など、あらかじめ心構えのできている訓練とは違い、突然やってくる災害に対する不安感が共通して感じられる内容だった。

イ 訓練は全体的によかったか

よかったと思える「訓練内容」を述べたものが12件で最も多い。

「訓練内容」を分類すると「消火」「応急救護」及び「通

報」がそれぞれ3件だった。「消火」については「消火器に触れてよかった」という内容が2件、視覚障害者から得られた。「応急救護」では「(毛布など)担架作成」がよかったという意見が2件あった。

「訓練内容」に関する意見について多かったものは「よかった」「おもしろい」といった主旨の「好意的意見」の8件だった。「交流が持ててよかった」は2件で、「疑問を聞いてよかった(視覚)」「交流できた。心が通い合った(肢体)」といった回答だった。

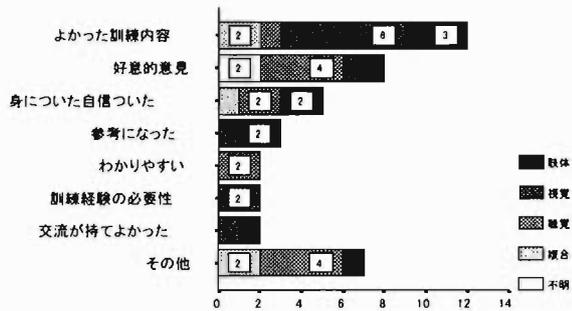


図 18 訓練は全体的によかったか (件・複数回答)

ウ 今後も防災訓練に参加したいと思うか

今後も防災訓練に「参加したい」と答えた人は76%で、参加したくないと回答した人を大きく上回っている。

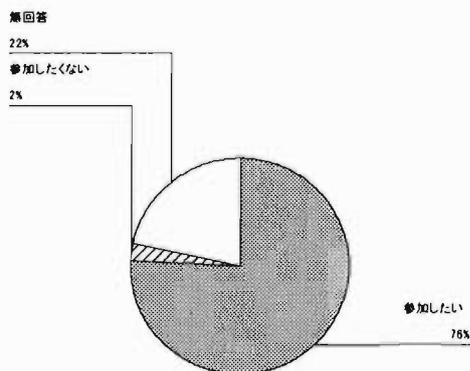


図 19 今後訓練に参加したいか (%)

エ 防災訓練の場所等で望むことは何か

防災訓練の場所としてどういう場所がよいか例を挙げて聞いたところ、最も希望が多かったのが、「地域センター」で15件、ついで「福祉施設」で14件だった。同じ質問で、どのような環境で訓練を行いたいかを聞いたところ、「段差のない場所」が7件、「家の近く」が5件と多かった。

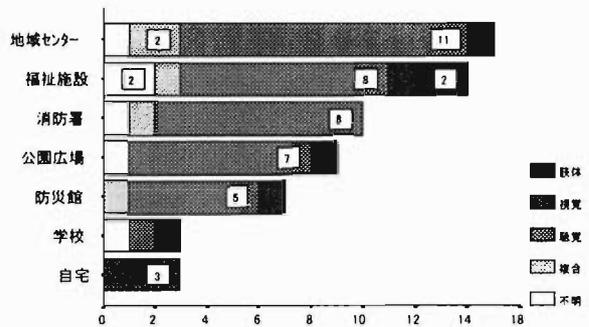


図 20 どのような場所で行いたい (件・複数回答)

これらの結果から、訓練の場所・環境としては、「地域センター」のような近くで行き慣れている所、あるいは「福祉施設」のように段差がない、手すり・トイレ等に障害者に対する配慮のある施設を希望している人が多い。

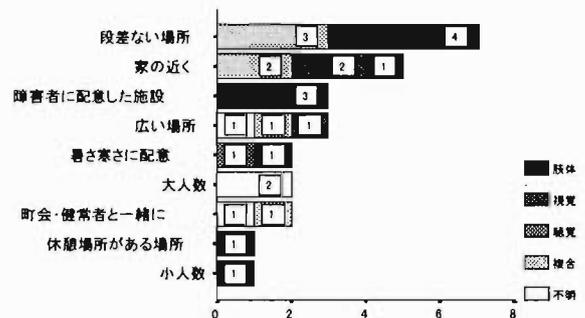


図 21 どのような環境で行いたい (件・複数回答)

オ その他に何か意見があるか

訓練全般に関しての意見で最も多かったのが「訓練内容の希望」(6件)で、「今いる場所から、他の避難場所への避難訓練(複合/肢体と聴覚)」などの具体的な訓練種目についての提案もあった。次に多かったのが「ビデオ・スライド等追加してほしい。(聴覚)」など「障害に配慮した訓練を」に関する内容のもので4件あった。

「訓練実施・普及の必要」(3件)に関しては「常に訓練しなければ、年1回(の訓練)では、すぐにできない(複合/肢体と聴覚)」などの普及の必要性を述べたものや、「資器材の改良を」(3件)については「(手が使えないので)足をレバーにかけて使う消火器を作ってほしい。(肢体)」などがあつた。「その他」(14件)については「情報障害者への(災害時の)情報伝達手段の確立」(聴覚)「近所に自分の存在を知らせるのが大切(肢体)」などの意見があつた。

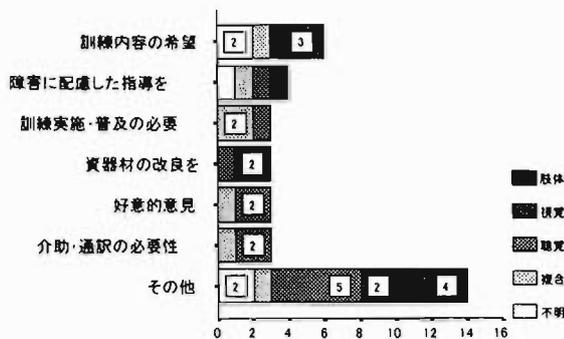


図 22 その他（件・複数回答）



写真 1 車椅子利用者に対する消火訓練指導

6 消防職員に対する聞き取り調査

身体障害者に対する防災訓練で、中心となって指導に当たった消防職員 29 名から、訓練指導時の推奨事項、反省事項、その他気付いた事項等について、自己記入式で調査を行った。

(1) 指導上の推奨事項

ア 消火訓練について

肢体不自由者への消火器の取扱いの指導にあたり「付添い人を付けたこと」、聴覚障害者への指導で「火災時には五感（視覚・聴覚・臭覚・味覚・触覚）を活用する必要性を指導し、実践的な避難の仕方等を展示した」などの回答があった。

イ 地震体験訓練について

聴覚障害者に対して「参加者全員に体験してもらった」「時間をかけ、ゆっくり説明した」「障害者にとって興味をひく内容の指導ができた」という回答があった。

ウ 通報訓練について

肢体不自由者への指導では「全員が見やすいような席の配置をした」「椅子に座ってもらった」など実施環境の配慮を述べたものや、「片手が不自由な人に対して受話器を上げ、一度置いて 119 を押すように指導した」といった個々の障害に配慮した指導方法についての回答があった。

視覚障害者の指導では、「対象者を動かすことなく、訓

練用の電話機を移動させることで、対象者の負担を軽減できた」「実際に体験してみてもできないことが発見できた。（例えば 119 のボタンがどうしても押せない）実際に体験することが必要」といった回答があった。

エ 応急救護訓練について

視覚障害者に対しては「言葉ではわかりづらいので、実際に手で触ってもらえるようにした」という障害に配慮した指導法についての回答があった。

聴覚障害者に対しては、地震体験訓練と同様の回答を得られた。

オ 全種目に共通する聴覚障害者への指導について

訓練種目を問わず、どの訓練についても聴覚障害者を指導する上で推奨できる回答が多く見られた。

消防職員自身が心がけたこととして「手話通訳に併せてゆっくりしゃべるようにした」「ホワイトボードに指導内容のポイントを書き出し、理解を深めた」「説明だけではなく展示を多く行う」など、話し方や視覚に訴える指導方法についての回答があった。

訓練によっては、手話のできる消防職員が出向した訓練もあり、その訓練において「消防職員の中に手話のできる者がいるということを意識づけたことは、聴覚障害者にとって安心につながるのではないか」という回答があった。

障害者への聞き取り調査においても、手話のできる指導者へのニーズがあり、また、手話の習得により「障害への理解」も深まると考えられることから、消防職員が積極的に手話を学習することが望ましい。また、実際に手話通訳をした職員からは「消防用語は訳すのが難しい。事前の打ち合わせが必要」という回答があった。消防職員でも専門用語を訳出するのが困難であるならば、職員以外の手話通訳者にはなおさらのことであり、より綿密な事前の打ち合わせの必要があると考えられる。

カ 全種目・全障害に共通する事項

主催が他団体である場合の防災訓練のメリットを述べた回答が多かった。主な回答として「（消防署が独自で実施する場合よりも）参加者が広範囲になり、子供やお年寄りなどの参加もあり、活気がでた」というものがあった。

他に災害時支援ボランティアの活用に関する回答も多く挙げられた。「（指導者の人員が確保できることにより）小グループでの指導が行え、きめ細かい指導ができた」、「地域に密着し」また「熱心に」活動した、その結果、「ボランティアの育成機会にもなった」という好例もあった。

(2) 指導上の反省事項

ア 消火訓練について

肢体不自由者への指導において「個人個人にあった消火器の使い方をどうしたらよいか」「訓練用の消火器では障害の程度により使用できない人がいた」といった「どの部分に障害があるか」「どういった症状なのか」、人に

より困り方が千差万別である肢体不自由者への対応への「戸惑い」が伺える。

イ 通報訓練について

視覚障害者に対しては「全員が体験することが望ましいが、時間的制約で体験できない場合もあることをあらかじめ断った方が、体験できない人が落胆しなくてすむ」という内容の回答があった。

また、聴覚障害者への指導は、電話による通報ではなく「ファクシミリ」による通報を指導した方がよかったという回答が見られた。

ウ 応急救護訓練について

肢体不自由者への指導では「車椅子の方が三角巾を使うのは難しそうなので、何かよい方法はないか」という意見があった。

視覚障害者に対しては、目の不自由な彼らに「三角巾を指導する際のわかりやすい言葉の言い回しに苦労した」というものがあった。

聴覚障害者の指導に関しては「あらかじめポスターや絵を用意」したり、「説明は手話だけに頼らず、黒板を使用」したりするなどして、手話だけではわかりづらい部分や特に印象付けたい事項を視覚的に補う必要があるだろう。

エ 全種目に共通する肢体不自由者への指導について

「個人個人の障害にあった訓練をどうするか考えさせられた」という回答だった。

オ 全種目に共通する視覚障害者への指導について

「障害の程度等について理解が不足していた」という内容だった。

カ 全種目に共通する聴覚障害者への指導について

手話通訳を介した訓練において「一般の訓練より時間がかかり、体験的な指導ができなかった」「対象者は実技実施中も手話通訳を注目して理解しづらい部分もあった」「間の取り方に苦慮した」などの回答があった。

手話通訳者を介した訓練では説明を訳出するため、健常者を対象とした訓練よりも時間がかかることが前提であり、限られた時間内で効率よく訓練を行うためには訓練内容を必要最小限に絞ること、手話通訳者との事前の打ち合わせが不可欠である。

打ち合わせの段階で主な消防用語の手話訳を載せた指導マニュアル等を配布すれば、手話通訳者にとっての消防用語は難しく、相当の熟練と事前準備を要するという手間をクリアすることができるのではないだろうか。

訓練対象者に指導内容のポイントを載せた資料を配布することで、手話通訳に注目するあまり、展示を見そびれるという問題を解消することが可能と考えられる。

「説明の際、ジェスチャアを交える」「理解したか、相手の顔を見て判断する」「(筆談のため) 筆記具・メモ帳を携帯する」「質問事項についてはあらかじめ、アンケート用紙に記入してもらえば、きめ細かい指導ができる」等、消防職員自身がすぐにも取り組める工夫を挙げて

いる回答もあった。

訓練の環境については「参加者と指導者(手話ができる人)の人数の割合を考える」「立ちっぱなしで参加者が疲れたようだ」「指導者は一段高い位置で説明した方が見やすい」という内容の回答があった。

なお、「人によっては手話を理解できない人もいるので、分かりやすい資料や筆談を活用してほしい」という意見もあった。

キ 全種目・全障害に共通する事項

「時間制約があった」「事前の打ち合わせが少なかった」「障害者がどのようなことを知りたいか把握し、障害者にあった指導方法を考える必要がある」などの意見があった。

(3) その他

ア 消火訓練について

肢体不自由者の指導に関するものとして「消火よりも避難をいち早くするような指導をした方がいい」「肢体不自由者が簡単に操作できる消火器を開発してほしい」といった意見が挙げられた。

聴覚障害者に対しては「絵描きの資料があれば指導しやすい」という意見があった。

イ 応急救護訓練について

聴覚障害者への指導について「将来的には救命講習を実施したい」という回答があった。

ウ 全種目に共通する視覚障害者への指導について

「マンツーマンがベター」という意見や「先天性の障害か後天性かにより理解度が異なるので事前に対象者について把握することが必要」といった意見が挙げられた。

エ 全種目に共通する聴覚障害者への指導について

「少人数での指導がベター」「近隣の協力が必要」という意見や「障害者指導用の資料を作ってほしい」といった意見が挙げられた。

オ 全種目に共通する視覚障害者及び聴覚障害者への指導について

「障害を理解するために『目隠し(視覚)』や『耳栓(聴覚)』等をして訓練出向前に相手の立場を体験する必要がある」という、障害把握のための具体的な手法の提案があった。同様の方法で「障害を理解してほしい」という意見が障害者側からも挙げられている。

カ 全種目・全障害に共通する事項

訓練参加人員の確保等のためにも「他機関主催の行事に消防機関が参加し、指導を行うのがいいのではないか」という意見もあった。

「事前打ち合わせをしっかりとすることにより、障害者が何を知りたいか把握し、できる範囲を見極める」という意見や「消防署としての対応、署員教育、障害者との接し方が難しいので、訓練指導用マニュアルを早急に作ってほしい」という要望があった。

障害者が防災指導において何を求め、障害に応じてどのような指導方法が適切かを示す「指導者用マニュアル」

のニーズは高いものと推測される。

7 考察

それぞれの障害について、特徴的と考えられる回答を取り上げて、考察すると、以下のとおりである。

(1) 肢体不自由者に対する指導は、一人一人の障害にあった方法により実施する

肢体不自由者は障害の部位・範囲・程度が千差万別であり、指導にあたっては、一人一人の状態に即した配慮が欠かせない。

ア 消火器はそのままでは、障害の部位によって使用できない人が多い。「ペダル式の消火器を作ってほしい」等、改造を望む意見もあるが、まずは、使用方法を工夫してみる必要がある。(例えば上肢麻痺の場合は肘などの他の部位で押す)

また、「(手に)力が入らないので水が火のところまで届かない」「手がふるえてしまって水をかける位置がねえな」などの意見もあり、火を消すことを断念し、「火事だ!」と周囲に知らせ、協力を求めることに重点をおくことも大切である。

イ 避難訓練では、「介助者がいてうまくできた」という人もいるが、介助者がいない場合には、どのように行動するか、例えば、「周囲に呼びかけまず介助者を求める」「車椅子をおりても何とか移動できる人ははって逃げる」など、一人一人の自分に合った防災行動を考えてもらうことが必要であろう。

ウ 両手を用いた緻密な動作が伴う応急救護訓練は、上肢障害の人にとって非常に困難であり、他の訓練に比べて肢体不自由者が体験している割合は少ない。また「車椅子の人が三角巾を使うのは難しそうである」という、指導者側から見た意見もあった。また、下肢障害の人にとっても「指示できるが自分でやるのは無理」「(毛布等で)担架作成できるが搬送は無理」「三角巾できるが担架(作成・搬送)は無理」など、一人一人の障害の状況によって、できることとできないことがまちまちである。消火、通報、避難が自分自身の安全を確保するために必要な手段であるのと異なり、応急救護は自分以外の者を対象としており、心肺蘇生や大出血の止血以外は、緊急性も低い。実際に体験してもらい、できない場合は周囲に協力を求めることが大切であると考えられる。

(2) 視覚障害者に対する指導では具体的な指示と実体験が大切である

ア 視覚障害者にとって、主な情報入手手段は聴覚と触覚である。したがって彼らに周囲の情報を知らせる場合、言葉を精査して使うことが肝心である。とくに、方向や位置を知らせる場合、具体的に「あなたの右側」、「椅子の前足を持ってください」等指示を行う必要がある。指導者の印象を答えた中で『あれ』『これ』『ここをこうして』など全くわからない表現が多い」というような意見もあった。また、「触る」ことにより事物を把握する「触

察」は、視覚障害者の教育現場でも使われている方法である。精査した言葉による説明と、実際に触ってもらう触察や、体験してもらうことを行うことが、視覚障害者の訓練指導では重要である。

イ 消火訓練において「火と自分の位置がわかりづらい。どちらに水をかけたらいいかわからない」という感想があったが、位置を具体的指示することや、実際に火を燃やし、肌に熱気を感じる事等、聴覚・触覚に訴える指導方法によりクリアできるケースではないだろうか。また「消火器に触れたのがよかった」という回答も多く、実体験を望む人が多いことがわかる。

ウ 応急救護訓練においても、具体的な説明を心がけても理解しづらい部分は可能なかぎり、マンツーマンで手取り足取り指導し、実体験してもらうことが効果的であると考えられる。相手の手をとって導くことは失礼なことではない。

エ 火災現場や事故現場等の映像が見せられない分、録音テープなどで、生きた音で示すことは有効であると思われる。

(3) 聴覚障害者の指導ではコミュニケーションの取り方に工夫が必要

ア 聴覚障害者からは、今回の聞き取り調査では、ネガティブな回答は多くは見られなかった。しかし、通報訓練の感想で「うまくできなかった」と回答している人が多く、訓練の全体的な印象では「説明のスピードが早すぎた」という回答も挙げられた。

イ 障害の特性から、電話を使った通報訓練は難聴者でも困難だということは容易に予想がつくが、それ以外の訓練にも「わかりにくい」要素は存在するため、実施にあたっては、「わかりにくさ」をどう克服していくかを意識する必要がある。

ウ 手話通訳者を介するということが最も簡便であるが、手話のできない者が、コミュニケーション(話し手と聞き手の間に、音声の言語を媒介に情報が共有される過程)上のハンディキャップを持つ彼らに指導内容をよくわかってもらうための原則は、①本人に働きかけられていることをはっきりわからせ、②騒音下や何人も人がいっぺんに話しかけるようなことは避け、③身近なことばでゆっくり、はっきり、必要なことは繰り返して、④実物を示したり、字や絵を書いたりといったことなどを心がけることだという。

エ さらに重要なのは、表情・身振り等で相手の反応を適切につかむことである。これらのことは、説明を始める前に指導者は必ず手を挙げるなどして注目させ、相手に話しかけていることを明確にしたり、パネルやリーフレットを活用する等、実際の指導で生かすことができる。

オ 言語障害者の言わんとすることを、的確にキャッチするには、①どんな状況、文脈で出された表現か推測すること、②筆談や、実物を示す等、他の方法で表現することができないか、③ある程度、言っていることの推測

がついたら「はい」、「いいえ」など、選択式に回答できるようにかたちに話題を狭めるなどの方法が有効である。自分の言いたいことがうまく伝えられるのならば、自信につながるかと推測される。

(4) 訓練方法の提案—自力で困難な場合の人にやってもらう訓練と他の避難場所への避難訓練

ア 初期対応のうち、自力で無理だと見極めたものがあれば、周囲の人に頼んで代わりに何らかの対処をしようという訓練も必要である。聞き取り調査の中でも「通報と消火器は自力では無理なので、人にやってもらう訓練を（視覚）」「救出される訓練をしてみたい（肢体）」、「消火は無理なので、まわりに知らせる訓練を」などの、訓練方法の提案があった。

特に、共同住宅等で日頃エレベーターを使用している車椅子利用の肢体不自由者と近隣者が協力して避難階へ下りる訓練はぜひとも必要であると考えられる。

イ また、肢体と聴覚に障害をもつ複合障害者から「今いる場所から別の避難場所への避難訓練をしたらどうか」という提案があった。車椅子を使用している人にとっては、実際に避難場所まで移動してみることで、途中の段差や、路上におかれた看板・放置自転車など避難時の妨げになるようなものがないかを調べ、安全な避難経路を確認することにつながり、これは東京都震災対策検討委員会の「災害弱者防災行動マニュアルへの提言」の中でも、推奨されている。こういった形の訓練は、視覚障害者がメンタルマップ（頭の中につくる地図。これに基づき、移動すると言われている）を形成する上でも役に立つ。

(5) 必要以上に気を遣うことはないが、差別的言動等には注意する

ア 地震体験訓練の感想の中に、「これから震度が上がるという声掛けがあった。本当の地震は突然なので気を遣われすぎるとどうかと思う（視覚）」という意見や、消火器の取扱いの指導で「見えないからわからないというのではなく、（青・白・黄色の表示）の色の説明をしてほしかった（視覚）」という意見やあった。ストレートに「気を遣いすぎる（視覚と聴覚の複合障害者）」という意見があった。

同情から必要以上に気を遣ったり、手助けしたりすることは、受け取り方によっては子供扱いされ、自尊心を傷つけられたと思い、いい印象を与えない場合もある。危険を回避しなければならない状況は別として、障害者が援助を求めた場合に、自然な形でサポートするように心がけたい。

イ 一方、『耳が悪い』と言うより、『耳が聞こえない』と表現した方がいい（聴覚）」というように、不用意な発言が、悪意がなくても、相手の感情を損ねてしまう場合もある。差別的ととられかねないような発言には、気を遣う必要がある。

(6) 指導者にとっての障害者に関する情報が不足して

いる

ア 消防職員の聞き取り調査からは、障害者の立場に立ち、自分たちなりに工夫をしていることがわかる。障害者側からのニーズと、指導者側が配慮した点には、合致しているものも多く、そのことが、障害者用聞き取り調査での好意的な回答の多さにつながっていると思われる。

しかし、障害者からの「障害者の立場に立った指導を」望む声は多くある。指導者からの「個人個人の障害にあった指導はどうしたらいいのか」「障害の程度などの理解が不足」「障害者の接し方が難しい」といった意見も多く挙げられた。日頃消防職員は障害者に接することは少なく、会話したこともほとんどないと思われる。

イ 身体障害者が防災訓練で何を身につけたいかを把握し、訓練を成功させるためには、十分な事前打ち合わせを行い、参加者の障害状況をよく理解し、指導方法をイメージトレーニングするなど、入念に準備を行う必要がある。

ウ また「指導用マニュアルを早急につけてほしい」という要望や、手話のできる消防職員から「消防用語を訳するのは難しい」という要望が挙げられていることから、消防用語の手話訳例を載せた身体障害者指導用マニュアルが、必要ではないかと考えられる。

8 まとめ

本聞き取り調査を通じて明らかになった、身体障害者に対する防災訓練指導上特に留意すべき事項は、次の2点に集約できる。

(1) 参加者の障害状況をよく理解し、一人一人の障害の状態に即した指導に配慮する。

(2) 訓練に参加することにより、身体障害者自身の防災行動力を認識してもらい、不可能な場合は、代替行動を訓練指導する。

【参考文献】

- 1) 石部元雄ほか3名 : ハンディキャップ教育福祉事典1 発達と教育・指導・障害学習、1994年
- 2) 東京都震災対策検討委員会 : 災害弱者防災行動マニュアルへの提言、1999年

STUDY OF THE EFFECTIVE WAY OF THE DISASTER DRILL INSTRUCTION TOWARD HANDICAPPED PEOPLE(1)

Minoru IIDA*, Takayuki KUMAKURA**, Ayako MOTOHASHI*, Miho WATANABE***

Abstract

In order to grasp the more suitable way of the training toward handicapped people, we ascertained three issues. The first issue is to make sure of the possible and impossible behavior of handicapped people. The second is the things that instructors should take heed of during a drill. The third is the improvement of drill methods and tools.

Main results are follows:

1. The opinions/views of the drill participants are favorable as "I got confident," or "The instructor taught me politely."
2. We need to guide handicapped people by a suitable method for each difficulty.
3. When we instruct visually impaired people, concrete directions and actual experiences are important.
4. When we instruct the people hard of hearing, it is necessary to devise the way of communication.
5. More information is desired for instructors.

*Fourth Laboratory *Koishikawa Fire Station ***Syakujii Fire Station